今日のイラスト 445　「 イラストでたどる萩往還㉗ 外郎の福田屋」　　古谷眞之助

一枚板の外縁が松の一木から出来ていて、かつて屋根に掲げてあった「白外郎」の大看板は、日田の儒学者・広瀬淡窓によるものだと教えて下さったのは、中原中也記念館名誉館長にして山口県立大学名誉教授、小説「外郎の家」「椹野川」の作者でもある福田百合子先生である。先生が「文芸山口」に掲載されたエッセイの中で私のことに触れていただいたことはかつて書いたが、大変名誉なことだと思っている。先生とはある会でご一緒してお話しするようになったのだが、会はコロナのためにずっと例会が中止になっているのが残念。

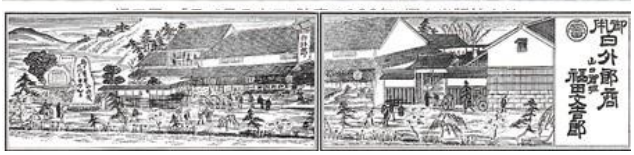
さて、看板はすでにないが、この松の外縁は今も健在で、私自身、萩往還のガイドでこの前を通り過ぎる時には、お客様に外縁に座っていただいて、たぶん「花燃ゆ」の文さんも座ったはずですよ、とか藩主専用の上段の間が設けられていたのです、などと説明するのが常である。もちろん福田先生の許可は得ている。旧制山口高校生か山口高商の学生と思しき男性たちが外縁でくつろぐ古写真も残っているし、古い版画にも福田屋が出てきて、眼を凝らすと外縁に腰かけていると思われる2、3人が確認でき、こちらには看板も見える。

イラストでたどる 萩往還 27 外郎の福田屋

山口の名物と言えば外郎、そしてその元祖が「福田屋」だった。蕨粉を用いて醸し出される独特の風味と食感が特徴。江戸期には歴代の藩主からも愛され、参勤交代の際にはここで休息を取るのが常だった。事実福田家には藩主用の上段の間が設けられていた。また往時、屋根の上には金箔塗りの大看板があり、そこに書かれた「白外郎」の文字は高名な儒学者広瀬淡窓によるものだった。イラストに見える一枚板の外縁は、上部の棟木とともに松の一木という豪華なものである。

下関の豪商で奇兵隊士でもあった白石正一郎は、文久三年（1863）十月二十七日、敬親公に福田屋に呼びだされて初めてお目通りが叶ったと自身の日記に書き残している。

文・イラスト＝古谷眞之助



ところで、最近はガイド付きではなく、地図を片手に一人で萩往還を歩く人をかなり見かけるようになったが、たぶん福田家の前を何も気づかずに通り過ぎているはずだ。手前みそは覚悟で言わせていただくなら、萩往還のような旧街道は、やはりガイドと歩くべきだと思う。そうでないと単に歩いただけで終わる。もし「歴史には関心がないから」と言う方がおられたら、「単に歩くだけなら車の来ない秋吉台の方がお勧めです」と言いたい。萩往還は歴史街道である。歩く方にはそれを味わって欲しいと思う。（2021.6.23 記）